

ローマ人への手紙第七四回質問

7 .. 8 しかし、罪は戒めによって機会をとらえ、私のうちにあらゆる欲望を引き起こしました。律法がなければ、罪は死んだものです。

7 .. 9 私はかつて律法なしに生きていましたが、戒めが来たとき、罪は生き、

7 .. 10 私は死にました。それで、いのちに導くはずの戒めが、死に導くものであると分かりました。

7 .. 11 罪は戒めによって機会をとらえ、私を欺き、戒めによって私を殺したのです。

7 .. 12 ですから、律法は聖なるものです。また戒めも聖なるものであり、正しく、また良いものです。

7 .. 13 それでは、この良いものが、私に死をもたらしただし
ようか。決してそんなことはありません。むしろ、罪がそれをもたらしただのです。罪は、この良いもので私に死をもたらし、
罪として明らかにされました。罪は戒めによって、限りなく罪深いものとなりました。

(ロマ七章八一―三節／新改訳2017)

(問一) 罪とその影響については、どんなことを言っていますか。

(問二)パウロにとって、その結果はどんなことですか。



死んでしまった者

(ロマ七章九節)

どんな人にも「律法なしに生きていた」という時期があります。このような時期を一生の間通してしまう人もおります。しかし、クリスチャンというのは、そういう時期を過ごしていた過去の生活から、「戒めが来た時、罪は生き、わたしは死んでしまった」という生活に入った者たちです。

ここでパウロが「わたしは律法なしに生きていた」と言っている時期がはたしてあったのかという疑問を抱く人がいるのではないかと思います。というのは、パウロはユダヤ人として、とくにパリサイ派のユダヤ教徒として、生まれた時から、厳格な律法の教育の下に育てられてきたわけですから、そういう疑問を抱いたとしても、別に不思議ではないでしょう。しかし、パウロはここで確かに、「かつて、わたしは律法なしに生きていた」とも言っているわけで、このことは一体何を意味しているのでしょうか。そのことを理解するには、文脈をたどっていくことが一番だと思います。

九節は八節に続く文章として理解しなければなりません。八節では、こうしるしています。「しかし罪は、戒めを利用して、わたしのうちにありとあらゆるむさぼりを生み出した。というのは、律法がなければ、罪は死んだものだからである。」これに続く文章なのですから、やはりこれはパウロの深刻な経験についてしるしていると見るべきだと思います。

それでは、彼が「かつて、わたしは律法なしに生きていた」とは、どういうことなのでしょう。ここで「生きていた」と言っているのは、この文章の最後にある「わたしは死んでしまった」と対照的な言い方で、「戒めが来た時、罪は

生き」と言っているのも、みな同様に象徴的で、相対的な表現なのです。ですから、「かつて、わたしは律法なしに生きていた」とは、律法が何と教えているかということを知ってはいいても、その真意を神の御前で本当によくわかつていたわけではないので、極めて傲慢に、元気よく、強そうに振舞っていたことを指しているわけです。彼が、ピリピ教会への手紙やガラテヤの諸教会への手紙の中で、次のように語っているのが、それです。

「熱心について言えば教会の迫害者、律法による義については、非難されるところのない者である。」⁽¹⁾

「というのは、ユダヤ教にいたころのわたしの前歴については、あなたがたはよく聞いているからだ。すなわち、度はずれに神の教会を迫害し、それを撲滅しようとしていた。そして同国人の中で、わたしと同年輩の多くの者たちよりもはるかにユダヤ教に身を入れ、先祖たちの言い伝えに対し、きわめて熱心であった。」⁽²⁾

今日、わたしたちの周りにいる未信者で、神なしに元気よく働いている人々の姿はみなこのとおりです。彼らはみな頭では一応、何が善であり何が悪であるかということを知っています。しかし、それは彼らにとってそれほど深刻な問題ではなく、とくに一般に道徳的であると思われる人々ほど、自分のわざに過信していて、生き生きとしているように見えます。

それは、主が譬で語られた、祈るために宮に上ったパリサイ派の男の祈りの中に、いかなく表わされています。彼は

こう祈りました。「神よ。私はほかの人々のようにゆるする者、不正の者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようでないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげています。」⁽³⁾もうひとりの取税人より、はるかに生き生きとしているように見えません。しかし、彼はまだ神の聖い律法の前に立ったことのない気の毒な罪人でした。

今日でも、多くの未信者は、クリスチャンのことを批判して、「罪だとか悔い改めだとか言って、青白い顔をした全無力のない連中」と言っています。神を知らず、神の御前における自分の本当の姿も知らない人間は、いかにも精神的であり、それに対してクリスチャンはいかにも無気力であると思っ
ているのでしよう。わたしたちも、かつてはそうでありました。しかし、今でも同じような考え方をしているとしたら、極めて問題で、祈るために宮に上ったパリサイ派の男と少しも変わらないと言っ
ていいでしょう。

次に、「戒めが来た時、罪は生き、わたしは死んでしまっ
た」とは、どういうことでしょうか。わたしたちが戒めについて知っ
ているという時、その多くは次の点で知っているのです。それは、戒
めの言っていることを文字の上で知っていると
いうことです。たとえば、「殺してはならない」という戒めにつ
いて考えてみますと、実際に手を下して人殺しをしていなければ、
自分はこの戒めを犯してはいないと考えること
とです。しかし、もう少し深く考えれば、実際に手を下して
人を殺さなくても、自分が相手に言ったことばが、その人の

心にグサリとささり、それがもとでその人が生きる望みを失い、ついに死んでいったという場合、それは人殺しにはならないのでしようか。また、自分がある人を憎み、その人が死ぬことを願うほどに憎み、ついにその人が生きる望みを失い、死を選んだ場合、それは殺人にはならないのでしようか。ですから、主は、兄弟に対して怒る者、「ばか者」と言う者も人殺しの罪を犯しているのだと教えられました。このことは何を意味するのかと言いますと、わたしたちが聖い神の御前に立つ時、だれひとりとして神の戒めを犯していないとは言えない者なのだということ。神の御前に立つ時、罪がはつきりと現われてまいります。罪なしと思っていた自分の目に、はつきりと罪が見えてきます。それが「戒めが来た時、罪は生き」ということです。

それでは、「わたしは死んでしまった」とは、どういうこととでしようか。神も自分の本当の姿も知らないうちは、わたしたちは生き生きとし、元気よく生活していたように見えたのですが、自分の罪を知った時、自分の力では何一つ善いことができないことを知りました。傲慢であった者が打ち砕かれ、主が山上の説教で語っておられるあの幸いな「霊の貧しい人たち」⁽⁵⁾「悲しんでいる人たち」⁽⁶⁾になることができます。それは、はたからは、元気がないように見えます。ですから、パウロはこの同じ手紙の中で「弱かった時」とか「不敬虔な者たち」という言い方をしています。それは、言うまでもなく死んでしまった人の姿です。もちろん霊的に死んでしまった人の姿です。

すると、ある人々は、救われる前の人間はみな、「自分の犯した違反と罪との中に死んでいた者たちであって、」⁽⁸⁾これは救われる前のすべての人間の姿であると言って、一般化して考えようとしています。しかし、そのように考えるかぎり、この個所でパウロが言っている意味を理解することはできません。パウロはこう言っています。「戒めが来た時、罪は生き、わたしは死んでしまった。」もしも救われる前の人間の一般的な姿のことなら、「戒めが来た時」という条件文は必要がなくなりません。それは、ちようと主が次のように語っておられるのとよく似ています。「健康人には医者が必要でない。しかし病人には必要である。……わたしは義人を招くために来たのではなく、むしろ罪人を招くためである。」⁽⁹⁾確かにこの世の中には義人などのいるわけはなく、すべての人は罪人のはずです。ですから、主が、「わたしは義人を招くために来たのではなく、むしろ罪人を招くためである」と仰せられたのが、すべての人を招くためだという意味であつたら、主の仰せられたことは意味をなしません。医者に行くのは確かに病人です。しかし、病人であつても医者に行こうとしない人がいます。自分が病人であることを自覚していないからです。すべての人は罪人なのですが、自分が罪人であることを認めようとしない人は、決して主のもとへは行かないでしょう。それと同様に、救われていない人は、だれでもみな霊的に死んでいるのですが、自分が本当に霊的に死んでいるとは思っていない人がほとんどです。そういう人でも、神の戒めの前に立ち、自分の罪がよくわかると、もう今までのように

から元気であることはできなくなります。自分は神のさばきによって滅ぶべき者であることがわかります。つまり、死んだ者なのだということがわかるのです。

この死んだ者だけが、キリストの恵みによって救われるという福音を理解することができません。自分の力で何かができると考えている間、わたしたちは決してキリストの恵みによる救いがありません。わたしたちは死んでいる者なのです。そこにあるのは、罪だけです。こうして、自分が死んでいる者だということがわかった者だけが、キリストの救いによって、いのちを与えられ、本当に生き生きとした人生に入ることができるようのです。

注①ピリピ教会への手紙三章六節。

(2)ガラテヤの諸教会への手紙一章二三―二四節。

(3)ルカによる福音書一八章一一―一二節 新改訳

(4)マタイによる福音書五章二一―二二節。

(5)同書五章三節。

(6)同書五章四節。

(7)ローマ教会への手紙五章六節。

(8)エペソ教会への手紙二章一節。

(9)マタイによる福音書九章一一、一三節。



